

ホテル「エルミタージュ」

気節の中にかすかに春の匂いがただよってくる二月末、友人と二人伊豆高原にでかけた。今年の寒さはきびしくて、早咲きの桜もうつすらと色づいているだけ、開花までは間がありそうで観光客はすくない。風も冷たく、早々に予約してあるホテルに向かった。温泉にはいつて暖まろうというわけである。ホテルは国道からすこし逸れて別荘地帯の中にある。バブル全盛のころに大企業は競って社員のためという名目で温泉地や別荘地に保養所を建てた。不景気になると真っ先に処分の対象となるこれらは小さなホテルとして再活用されているところが多い。私たちの向かったホテルもその一つで、人件費を節約してリーズナブルな価格を設定しているチェーンホテルの一つだった。

混み入った住宅街の、別荘地のなかにあるホテルだから探すのが大変である。看板を頼りに幾度か曲がりくねった道を迷いながらも、冬枯れの木立に囲まれた三階建てのファサードが突然目の前に現れたとき、予想以上の佇まいに驚いてしまった。

一流会社の役員専用の保養所だったというこのホテルは、煉瓦造りの車寄せに続くエントランスに茶褐色の大きな扉があつて、力をこめて手で開けるのである。

近づけば、さつと開く自動ドアが当たり前の現代、まるで役目を終えた住居の亡骸のようであつた。

ロビーは無人で静まりかえっている。フロントにも人影はない。大理石のフロアを歩き回り、前衛画家の作品であろうか、直線と曲線が入り混じつて、複雑な形を作っている暗い色彩の、金色の額縁に収まった百号はあると思われる絵の前でしばらく立ち止まる。ステンドグラスをはめこんだ吹き抜けの天井を眺めたり、らせん状に三階まで上がっていく階段の木製の手すりに見入つた。

我々の来訪に気づいたのか、どこからともなく蝶ネクタイの男性が現れて、チェックインの手続をしてくれた。それから彼は驚くようなことを言った。

「今日のお客様はお二人様だけでございます」

「え？ ほかにだれも利用者はいないってということ？」思わず念をおす。

「さようでございます。どうぞゆつくりとおくつろぎください」

中年のホテルマンはにっこりして部屋の鍵を渡してくれた。こじんまりしたホテルで

はあるが部屋数は？ と尋ねると「十二室ございます」とのこと。エレベーターはあったが私たちは年期の入った手すりにつかまって二階の部屋へと歩いていった。

十二室あるという客室はどういうわけか複雑に絡み合い、薄暗く奥の方へと続く廊下にはアラベスク風の彫刻を施した木製の、どっしりしたドアが並んでいる。私たちの部屋は一番奥の、広々とした和洋室であった。ツインベッドに応接セット、座卓をおいた和室があつて、会社の研修など、週単位で滞在するために作られたものである。家庭的な雰囲気の間部屋だった。

好奇心にかられて廊下伝いに館内を探索してみた。方々の扉のノブを開けてみる。鍵がかかっていない場所は、古風なシャンデリアが釣り下がっている多目的ホール、会議室には十二、三脚の革張りの肘掛椅子が大きな円形のテーブルを囲んで並んでいる。それぞれの部屋に木彫りの額に入った大型の風景画が飾っており、所有者はかなり絵画に造詣の深い人物とおもえた。

広々とした浴場、掛け流しのあふれるような湯量。窓の外は常緑樹の木立、山の中なのでオーシャンビューとはいかないがひっそりした雰囲気のほか、大浴場にたった二人で入浴。不思議な贅沢感である。夕食も二人だけ、水銀灯が、かすかなあかりを

灯す庭に面したテーブルで、先ほどの蝶ネクタイ姿の、フロントで会ったホテルマンが一品ずつ懇懇に運んでくる会席料理を味わった。贅沢感が次第に不安に変わっていった。

彼以外に従業員はいないのであるか。客が二人だけといつても一応ホテルである。客室係とか、レストラン関係のコックとか。食後、ロビーのどっしりしたソファに腰掛け、大型のテレビをみてしばらくくつろいだが、すれ違う人どころか、どの場所にも人影は全くなかった。私たちの対応をするのに、たった一人の蝶ネクタイの男性がすべて取り仕切っているのだろうか。人件費を節約しているといつても極端すぎはないか。

暖房はきいていて、居心地のいいロビーだけになおさら不審がつのっていった。部屋に引き上げ、寝る前にお風呂にと、静まり返った照明の乏しい廊下を歩いていく。静寂というものはあるときは精神を穏やかにするが、全く物音一つしないというのも精神をかき乱す要因の一つになる。すでに十一時を回っている深夜、二人だけで大きな浴槽に手足をのぼすがくつろぎ感はない。地の果てに立って、すべてから取り残されたような不安定な気持ち湧いてきて、早々に部屋に引き上げた。ベッドサイドの

小さな明かりを一つ残、して暗い闇の中に横たわった。

作家、村上春樹の作品に『レキシントンの幽霊』という短編がある。「僕」と一人称で書かれているが主人公は作者自身である。「僕」はケンブリッジに住んでいたのだが友人ケーシーがロンドンに旅行に出かけるので一週間ほど彼の家の留守番をしてくれるように頼まれて引き受ける。ケーシーはレキシントンに住んでいた。建てられてから百年は経っているだろう古くて大きくて、ひとときわ立派な家だった。

ケーシーが旅たって始めての夜、二階の客室用の部屋でワインを飲み、ベッドにくつろいで一眠りするのだが、夜中にふと目覚める。音がするのだ。海岸によせる波のようなざわめき。誰かが階下にいる。しかも一人や二人ではないようだ。不安にかられて音を頼りに廊下を降りていく。音楽も聞こえてくる。ロビーから音の聞こえる居間に通じる両開きの扉はぴたりと閉まっていて、その部屋から音楽や大勢の人の話し声が聞こえてくるのだ。笑い声さえ響く。どうやらパーティが進行中で踊っている人もいるような気配だ。

こんな真夜中に、おそらくは二十人以上はいるかと思える大勢の人がどうやって入

つてきたのだろう。背筋が冷える思いだったが、扉から漏れてくるさざめきは穏やかで変な人たちではないだろうという雰囲気だった。突然ひらめくものがあった。——彼らは幽霊なのだ——居間に集まってパーティを開いているのは現実の人ではない。大きく息を吸い込み、息を吐き、正常な感覚を取り戻すのに時間がかかった。玄関にいかつい番犬がいた筈だが、まったくほえなかつたのも彼らが幽霊だからであろう。恐怖を納得に変えて降りてきたときと同じように足音を忍ばせて階段を上がり、ベッドにもぐりこんでしばらくパーティの物音に聞き入っていたがいつのまにか眠ってしまった。

翌日、大勢の人たちの談笑がきこえた居間を覗いてみる。部屋には乱れはなく、昨夜自分の部屋に引き上げる前にそこで読んでいた本もソファの上に開いたままになっていた。パーティが開かれた形跡は全くなかつたのである。

この不思議な真夜中のパーティのことをケーシーにはもちろん誰にも話すことができなかつた。「留守の間変わったことはなかつた？」と聞かれても「とくに何もなかつたよ」とだけ答えたのだった——。

村上春樹は作品の冒頭で「これは実際に起こったことである。事情があつて、人物の名前だけを変えたけれど、それ以外は事実だ」と述べている。死者のパーティが催されている居間の扉を「僕」は開けなかつた。彼らを「見る」ことなく、外から感じただけであつた。「生」と「死」を扱っていて読むほどに奥深い作品であるが、私が伊豆のホテルで過ごした一夜もそんな不気味さを感じさせる雰囲気があつた。混み合つて騒々しいのも、もちろん不愉快だが、たつた二人の客というのもめつたにないことだろう。従業員を入れて三人、人家のあまり見当たらない木立のなかに、ぼつねんと立つホテルで一夜を過ごしたことになる。亡霊がでたとしても不思議はない。

企業隆盛のころは大勢の役員がくつろぎ、来客でにぎわい、パーティを楽しみ、議論したであらう華やかな邸宅は、いまや「宴のあと」のわびしさをただよわせ、わずか一組の客に一夜の夢を与えただけの淋しい館になつてしまった。リストラされ、あるいは降格され、また、地方にとばされた多くの役員の怨嗟がじつとりとしみついて、声なき声になつて、いたるところに充満しているようだ。

あるいは、このホテルは客足が悪くて廃業寸前なのだろうか。クラシックな構造上、いかにも効率の悪そうな設備は時代おくれで現代のニーズに合わないのだろうか。し

かし「隠れ家」としては最も適した立地条件と雰囲気を持つているとおもわれるのに。ごたごたした夢をたくさん見て朝を迎えた。

昨夜のホテルマンが朝食を用意してくれていた。やはりほかに人の姿はなかった。

「ゆっくりとお休みいただけましたでしょうか」「ええありますがとう」

十時のチェックアウトを待たずに、早々にホテルを後にした。重い扉を両腕で押し開いて外にでたとき、さっと朝の冷気が身体中を包んだ。伊豆山中の裸木が一陣の風でいっせいにざわめいた。くつろげただろうか、それとも……。

ホテルの名前は「エルミタージュ」。

(二〇一二年 三月)